

アゲハチョウ類のオニユリにおける吸蜜活動

堀 田 久

1. はじめに

洲本市安乎町の筆者宅の花畑には、オニユリの小群落(約60本)があり、毎年7月中旬から下旬にかけて開花している。今年(1988年)は例年より少し遅れて、7月20日に開花し8月8日まで花が見られた。この時期は、ナガサキアゲハやモンキアゲハの最盛期とも一致していて、アゲハ類が数多くオニユリの花を訪れるので、吸蜜の日周期活動などについて調べてみることにした。

2. 調査の期日と方法

オニユリが開花した7月20日から、毎日花に飛来するアゲハ類を観察したが、時刻を決めて個体数を正確に調査したのは、8月2日だけである。この日は6時より18時まで、2時間おきに10分間ずつ訪花するアゲハ類の個体数を種類別に記録した。なお、一度訪花したチョウが飛び立って再度訪花した場合については、確認できる範囲内を飛しょうして再度訪花したものは、同一個体として扱った。

オニユリへの訪花個体数調査結果

種 類	時 間		6:00	8:00	10:00	12:00	14:00	16:00	18:00	計
	天 気		6:10	8:10	10:10	12:10	14:10	16:10	18:10	
	温 度		薄曇	薄曇	晴	晴	薄曇	薄曇	晴	
		24℃	27℃	30℃	31℃	30℃	30℃	27℃		
キアゲハ					1	2		1		4
ナミアゲハ				1	2	2	1			6
モンキアゲハ	1			3	2	2	3	1	2	14
クロアゲハ					1			1		2
ナガサキアゲハ	1			1	2	3	6	6	1	20
計			2	5	8	9	10	9	3	46

3. 調査結果

(1) 時刻による個体数の変動

早朝や夕方には訪花する個体数は少ないが、10時から16時にかけては、アゲハ類全体としての個体数にそれほど変動がなく、午前と午後での吸蜜活動には顕著な差が見られなかった。ただ、ナガサキアゲハは午前よりも後に吸蜜する個体数が約2倍に増加している。しかし、これは1日だけの調査結果であり、またこの日の気温は10時から16時まで、あまり変化がなかったため、今後もっと詳しい調査をしたいと思っている。

(2) 吸蜜時間

ごく短時間訪花してすぐに飛び去る個体もあるが、観察をしていた10分間、初めから終わりまで同じ花で蜜を吸っていたものもあった。なお、新鮮な個体よりも、羽化後日を経て羽のいたんだものの方が吸蜜時間が長かった。

(3) チョウの種類と個体数

ナガサキアゲハとモンキアゲハの訪花個体数が多いのは、夏型第一化の最盛期でもあり生息する個体数が多いため、他のアゲハ類と比較して特にオニユリの花を好むからではないと思う。クロアゲハは8月2日の訪花個体数は少なかったが、7月下旬には訪花するクロアゲハもかなり見られた。アオスジアゲハは、花畑の周辺で時々見かけたが、オニユリの花を訪れることは一匹もなかった。なお、カラスアゲハは今年は全く見られなかったが、年によっては少数ながら吸蜜していたことがある。

(4) オニユリと他の花との比較

オニユリが開花している期間、この花畑とその周辺には、ダリア・キクイモ・ムクゲ・キキョウ・ニチニチソウ・アサガオ等の花も咲いていたが、アゲハ類はオニユリ以外の花を訪れることはほとんどなく、飛来してもごく短時間で飛び去っていた。しかし、オニユリの花が終わってからは、他の花でも盛んに吸蜜していたので、アゲハ類(パピリオ属)がオニユリの花を特に好んで訪れることは確かである。それは、オニユリの花の色彩や形、香気などがアゲハ類の訪花の条件に適している上に、蜜の量も多いためであると思われる。

オジロサナエを上灘で採集

オジロサナエ *Stylogomphus suzukii* は、淡路島ではこれまでに、洲本市猪ノ鼻川で幼虫(石原ほか, 1974)、洲本市鮎屋ダムで1♂(竹田, 1979)記録されている。

筆者は1986年8月8日に、洲本市上灘相川の溪流で本種の雄を1頭採集したので報告しておく。なお、標本は筆者が保存している。

(堀田 久)